

誕生石指輪、初登場―大正二年に三越から

大正二年には三越呉服店が、「12カ月指輪」の名称で誕生石指輪を発売した(図1-2-9)。アメリカで誕生石が決められたのはその前年の1912年であるから、ほぼ同時期に誕生石という宝石の新たな捉え方が日本に導入されたことになる。

広告によると、1月―柘榴石(ガーネット)、2月―紫水晶(アメシスト)、3月―ブラッドストーン、4月―※ダイヤモンド、5月―※エメラルド、6月―瑪瑙(めのう)、7月―※ルビー、8月―ムーンストーン(ムーンストーン)、9月―※サファイヤ(サファイヤ)、10月―オパール、11月―トッパス(トパーズ)、12月―※土耳其石(トルコ石)となっている。

いずれも18金製で一個5円50銭と金の石入り指輪にしては値段も比較的に手頃。値段を抑えているため、ダイヤモンド、ルビーなどの価格の高い宝石には※印が付けられ、これらは「何れもイミテーション」と表示されている。本来は6月の誕生石は真珠だが、なぜか真珠―模造真珠もあつたはずだが―は誕生石から除かれ、かわりに瑪瑙(めのう)となっている(コラム1-3参照)。また、8月のサードニクス(紅縞瑪瑙)も入っていない。

このように天然石と模造石が混在し、本来とは少し異なる誕生石指輪だが、一般への宝石普及(宝石の大衆化)に果たした役割は極めて大きかった。これ以降、三越に倣い他の貴金属宝飾店も誕生石指輪を取り扱うようになった。大正末期から昭和初期には天然石のみを使った誕生石指輪や合成石の誕生石指輪も売り出された。

なお、御木本真珠店では、大正15年12月の『真珠』No.22で、6月の誕生石は真珠または月長石であり、8月の誕生石は紅縞瑪瑙または橄欖石であると正しく紹介している。



図 1-2-9
三越呉服店「十二ヶ月指輪」広告
大正2年5月『女学世界』
見にくいですが、右上から1月—柘榴石、
2月—紫水晶、3月—ブラッドストーン、
4月—※ダイヤ、5月—※エメラルド、
6月—瑪瑙、7月—※ルビー、8月—
ムーンストーン、9月—※サファイヤ、
10月—オパール、11月—トパーズ、
12月—※土耳其石。

(コラム 1-3)
誕生石の由来と変遷

誕生石の由来については諸説あつて定かではないが、起源は古く、新約、旧約聖書までさかのぼる。

旧約の場合は、「出エジプト記」にユダヤ教の祭司は胸に12個の寶石を嵌めた胸板を掛けると書かれているが、これが起源だと言う。新約の場合は「ヨハネの黙示録」に書かれた「新しいイエルサレムの12の門の12の石垣の基礎の石」、いわゆるフアンデーション・ストーンが起源だという『ヨーロッパの宝飾芸術』⑨。

このような伝説が基となり誕生石の風習が生まれた。実際に誕生石が使用されたのは18世紀頃のポーランドで、ここに移住したユダヤ人が最初に用いたと言われる(ドイツが早いとの説もある)『寶石学』⑩、『宝石—神秘と伝説』⑪。

それを商業的にまとめたものが1912年8月アメリカの業者の組合大会の席上で「誕生石」として統一された。その時の誕生石とは次のようなものである。

1月—ガーネット、2月—アメシスト、3月—ブラッドストーン又はアクアマリン、4月—ダイヤモンド、5月—エメラルド、6月—真珠又はムーンストーン、7月—ルビー、8月—サードニクス(紅縞瑪瑙)又はクリソライト、9月—サファイヤ、10月—オパール又はトルマリオン、11月—トパーズ、12月—トルコ石又はラピス・ラズリ。

これが40年後の1952年8月には一部改訂され、6月にアレキサンドライトを追加、8月のクリソライトをペリドットに変え、12月のラピス・ラズリに代えてジルコンとした。アレキサンドライトやペリドット、ジルコンは当時の「ヨーロッパでの流行宝石」だったので、このように改訂したものと思われる。

なお、久米武夫『寶石學』によると、1912年の誕生石統一の時には、天然宝石のみならず合成宝石の誕生石としてやはり12種が定められたようだ。

1月―アレキサンドライト、2月―バイオレット・サファイヤ、3月―ブルースピネル又はアクアマリン、4月―ホワイト・ジルコン、5月―エメラダ、6月―セイロン・サファイヤ、7月―ルビー、8月―エリナイト、9月―サファイヤ、10月―ローゼルコン又はピンクサファイヤ、11月―ゴールデン・サファイヤ、12月―ジルコン。

これらの合成石は、日本でも、大正後期から昭和初期に「新誕生石」や「ポープ誕生石」として広く普及するこゝとなる。

誕生石(天然)は国によっても多少の違いがあった。日本でも昭和三十三年(1958)に、宝石組合(全国宝石卸商協同組合)が3月にサンゴ、5月にヒスイを加えて一般に普及した(『「全国宝石」40年の軌跡』⑫)。

合成宝石―合成ルビー、合成サファイヤ続々輸入

合成宝石は誕生石指輪にも用いられたが、それ以外のさまざまな洋風装身具や帯留などの和装の装身具にも盛んに用いられた。

日本で合成ルビー(合成コランダム)が用いられたのは明治後期の明治三十七年(1904)頃から(『日本の宝飾文化史』)。大正時代になると合成ルビーの他、合成サファイヤも輸入され、盛んに用いられた。合成サファイヤができたのは合成ルビーより遅く明治四十三年(1909)年頃。当初は美しい青色のものが少なかったが徐々に改良された。

これらが、どのくらいの量が使われていたかの記録はないが、大正五年(1916)に出版された鈴木敏編『寶石誌』⑬に、貴金属宝石商の店頭に陳列してある色石(ルビー、サファイヤ)の「十中の七、八は天然石に非ず」、しかも、「比較的高価に販売せるを目撃



図 1-2-10
合成ルビーの束髪簪
金、真珠

せり、危険至極と云うべし」と注意を促している。

それにしても7〜8割が天然石ではなく合成石だというのは驚かされたが、それが当時の実状だったのだろう。

当時、天然のルビー、サファイヤの入荷が少なかった上、合成石は成分、色、硬さ（硬度）とも天然石と変わらないため、業界では「宝石」として取り扱われていた。

合成宝石はカラフルでバラエティに富んでいること、大きさや形状が多種多様であること、そして何よりも価格が天然宝石に比して格段に低廉であるなどの特徴があるため、たちまちのうちに身近な宝石として広く普及した。そして「その普及がまた天然宝石に対する一般の感心を深め、かつ高める誘因となったことも疑いない」と評されている（『宝石百年』^⑭）。

特に合成ルビーは、若い女性に大変人気があった。あの真っ赤な石にどれだけの女性が魅了されたことか。

当時は良質のルビーが少なかったこともあり、多くの店で合成ルビーの金の指輪や束髪簪が売られていた（図 1-2-10）。

昭和初期も事情は同じである。そのため、現在に伝わる戦前のルビーの指輪と称されるもののほとんどは合成ルビーである。

合成サファイヤは、合成宝石としてではなく天然石と見誤ってダイヤモンドと合わせて用いられることもあった。そのため指輪など加工されてしまうと、その真偽の鑑定は容易でなく、なかなか見破ることはできなかった（『宝石百年』）。

金の結婚指輪も普及し始める

日本で結婚指輪が用いられたのは明治三十五年（1902）頃で、小売店から売り出されたのは明治三十七年（1904）である（『日本の宝飾文化史』）。

当時はまだ一部の人のみ受け入れられた風習だったが、大正期になると、中流以上の人々を中心に、より多くの人々が結婚にあたって結婚指輪を用いるようになった（図1-2-11）。



図1-2-11

大正8年9月『家庭雑誌』表紙
結婚指輪らしき金指輪をした婦人。

そのことを示すのが大正二年、前項の三越の「12カ月指輪」と同

時期に『女学世界』に出た甲丸かまぼし（当時は蒲鉾形と呼ばれた）の金製

結婚指輪広告である（図1-2-12）。

広告文中に「最近流行の結婚リング」とある。広告を出しているのは『女学世界』発売元の博文館代理部の通販会社。こういった会社を取り扱っていると見ると、当然、**東京の他の宝飾専門店**でも扱っていたと考えていいだろう。



図 1-2-12

「正十八金製指環」広告
 博文館代理部博通社
 大正2年5月『女学世界』
 「結婚リング」という呼び方もされている。

関西方面で結婚指輪に積極的に取り組んだのは尚美堂。尚美堂は江藤栄吉郎によって淀屋橋に創業された貴金属宝飾店で、創業当時から時計だけでなく、貴金属や装身具、美術工芸品などを取り扱った宝飾専門店『JEWELS』^⑮。早くも大正元年にはダイヤモンド専門の小冊子を発行するなどして大正時代の貴金属宝飾界のリーダー的宝飾店として名を馳せた。

この尚美堂が大正二年に出した商品カタログには金製の結婚指輪が紹介されていて、男性が女性に贈るだけでなく、西洋式に「必ず相互に交換」することを勧めている(図 1-2-13)。



図 1-2-13
「金製結婚紀念御指環」
尚美堂
大正 2 年 1 月 『尚美堂新品録』より

立爪（ティファニーセッティング）と「ねじ梅」

ティファニーセッティングによる立爪が大正の初めにすでに販売されていたというと、ちよつと早すぎるのではという疑問を投げかける人も少なくない。

だが実際には小売店で売られていた。その時期は大正五年で服飾時計店が最初に扱ったと、これまではされてきた『わが組合史』⁽¹⁶⁾。しかし、もう少し早い時期に、大阪の宝飾店が扱っていたようだ。それを示すのが、大正二〜四年の大阪の尚美堂発行の通販カタログ『尚美堂時報』。この時期の表紙は連続して立爪の絵が揚げられている（図 1-2-14）。大形ダイヤモンドの輝きを最も引き立たせるのはこの立爪であると知っての導入だったのだろう。

当初、立爪は単に「爪留」と表記されることが多く、業者間では「カニの目玉」と呼ばれていた（「鏝のあゆみ」⁽⁵⁾ ⁽¹⁷⁾）。立爪という呼称が一般化したのは昭和初期になってからである（昭和三年 9 月、さのや宝飾店（東京・浅草）広告）。

なおティファニーセッティングは 1886 年、ティファニー宝飾店（アメリカ）の創始者チャールズ・ティファニーが開発したダイヤモンドの留め方。6 本の爪でダイヤモンドを高く持ち上げて留めることによりダイヤモンドの輝きが一層高まる。



図 1-2-14

立爪指輪

尚美堂

大正2年10月『尚美堂時報』より

立爪の発売とほぼ同じ時期に、「ねじ梅」と呼ばれる日本オリジナル指輪も登場した(図1-2-15)。立爪は明らかにティファニーセッティングの模倣だが、当時の宝飾店や鋳職(貴金属加工技術者)は外国の真似ばかりしていたわけではなく、このような独創的な指輪も開発していた。

「ねじ梅」は「捻り梅留め」を略した言い方で、梅模様の石座にダイヤモンドをセットする石留方法である。

この石留指輪の見事さは「当時外国の人の嘆称するものがあつた」という(『宝石百年』)。

確かに現在の私たちが見ても美しく、戦前までの日本を代表する指輪といってもいいだろう。

図1-2-16はその実物で、腕は18金製、石座はプラチナ製のねじ梅指輪。この頃こうした金とプラチナのコンビ製品も作られていた。

なお、「ねじ梅」はダイヤだけでなく他の宝石にも応用され、大正後期から昭和初期と長く流行した。また「ねじ梅」のヒットが参考

になったのだろうが、「菊形」や「桔梗形」「撫子形」「桜形」など、

花モチーフの18金製花形爪指輪も数多く作られた(図1-2-17)。

これらいずれも一点一点、爪の部分をヤスリで削り出して作った品々で、そのレベルは高く現代でも簡単には再現できない。(量産用の精密鑄造法(キャスト法)が広く用いられるようになるのは、ずっと後の昭和40年代になってから)。



図 1-2-17

花モチーフの指輪

右上から菊形、桔梗形、撫子形、桜形

大正 2 年頃、三越呉服店『指輪時計埴物目録』

(みつこしタイムス第 11 巻第 9 号付録—臨時増刊) より



図 1-2-16

ねじ梅指輪

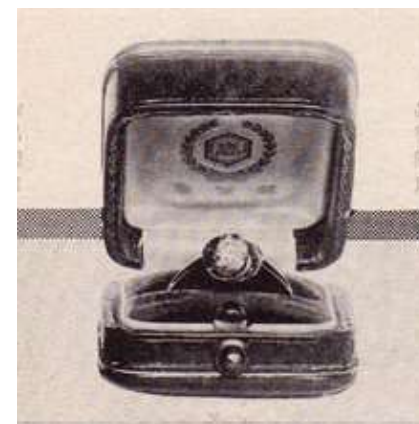


図 1-2-15

ねじ梅指輪

尚美堂

大正 3 年 11 月『尚美堂時報』より

(コラム114)

「指環」と「指輪」

指輪は英語のフィンガーリング (finger-ring) の日本語訳。この訳には2つの表記があった。図1-2-9の広告では現在と同じく「指輪」と書かれ、図1-2-12や図1-2-13の広告では「指環」と書かれている。

「輪」も「環」も円い形を意味するが、指輪に用いる場合は「環」の方が古く、明治時代の広告や小説『金色夜叉』などでの表現を見ると「指環」の方が、かなり多い(『日本の宝飾文化史』)。

大正時代になると「指輪」表記が増えた。しかし、ここで見たように、まだまだ「指環」を使うことも多く、この傾向は昭和12年頃まで続いた。

一方、図1-2-12の文中にあるように、西洋式に「リング」という言い方も使われ、後でも紹介するが〇〇リングという言い方は、けっこう出てくる。これは明治時代にはなかった言い方である。意図的に使い分けていたかどうかは定かでないが、表記のしかた一つにも違いが出るところには興味がわく。

ちなみに、『指輪の文化史』^⑮では「指輪」がはじめて用いられたのは、『外来語の語源』(吉沢典男他)によって「大正十三年に用いられはじめている」としている。だがすでに見たように、三越では大正二年には「指輪」を使っているし、古くは明治37年の大西白牡丹の広告でも「指輪」が使われている(『日本の宝飾文化史』図9-17参照)。これまで言われているより「指輪」の使用は早かったようだ。

なお、その後も「指環」という表記を好む人もいて、現代でも昭和四十年刊の奥村博史の指輪エッセイは『わたくしの指環』となっている。また昭和五十六年に寺尾聰が歌って大ヒットした「ルビーの指環」も「指環」である。